

シンポジウム／口承文芸研究のこれから

研究対象としての「二次的な声の文化」

真鍋 昌賢

はじめに 枠組みを問い直す視点

学会創立二十周年記念号では、「口承文芸」の「落日」、つまり「口承文芸」が「歴史的使命」を終えたという考え方をどのようにとらえるのか、またのりこえていくのかということがテーマとなっていた。その前提として重要であったと思われる二点を、川田順造の指摘に基づいて確認しておこう。ひとつ目は、一九六〇年代以降の世界的な社会変化、生活意識の変化のなかで、社会全体のコミュニケーションにおける「口承」の位置が変化してきたことである。「小澤他一九九七・二六―二七」。ふたつ目は、「伝承の危機」が指摘される状況とは、研究者の求めてきた「伝承」がなくなりつつあるだけなのではないかという認識である。「川田一九九三・二五―一七」。ここで言う「伝承」のなかに、「口承文芸」を含めても差し支えないだろう。つまりは、「口承文芸」の変容と生活世界の変容に対応するために、

研究者側の認識論を刷新していくことがうながされていたと考えていい。この十年間、口承文芸研究において共有されてきたキーワードは、声、身体、パフォーマンス、メディア、記憶、歴史認識など多岐にわたっている。口承文芸研究にもちこまれたこれらについての議論は、主に「現代（現在）」あるいは「近代」を対象とした事例研究においてなされてきた。⁽¹⁾その一方で、調査論、研究者論、ジャンル論、資料論といった研究の枠組みそのものを問い直す省察も、直接的にあるいは間接的に取り組まれてきたと言える。⁽²⁾

口承文芸研究における研究領域の拡張と、研究する側の視点の刷新の両方が意識的に進められていく必要があるとすれば、これからの口承文芸研究がむかうべき方向性とは、どのようなものになるのだろうか。もちろん、研究に取り組む者それぞれの立場から、多様な指摘がありうるはずである。ここで、本稿の関心に沿って参照しておきたいのは、関一敏による「ことばの民俗学」をめぐる議論である。関は、民俗学がみずからの「古典的形式化」をまぬがれる工夫を、研究者側で用意する必要があると呼びかける「関一九九八・二六」。この呼びかけには、研究者側の視点の更新という点において、先に挙げた川田の指摘と類似のメッセージが含まれているだろう。関自身は、「しあわせの民俗誌」を構想する立場から、生活実践にうめこまれたことばの運用を鋭敏に受けとめつつ、生活者の思想や戦術の記述にむかう方向性について述べている「関一九九八・二一―

二五」。それは、ことが運用される文脈を慎重に見極めつつ、生活世界の構成員や生活感情の表現力が生まれ、維持され、変容していく過程を議論していくことでもある。生活実践のなかのことはへのこうした注目は、日常生活のことばのやりとりへのみ向けられるのではない。プロフェッショナルな語り口に注目し、その語りがわれわれに向けてどのように投げかけられているのかという関心も重要であるだろう。いずれにせよ、研究者の設定したジャンルを批判的にとらえつつ、生活の文脈におけることばの力を問い直して論じるための思想と方法が必要である。以下では、生活を支えたり、生活にリアリティーを与えたりしている声としてのことばの技術／芸術を、語用論的な視点から論じる可能性をさぐりたい。

二 高齢者と生活のなかのラジオ

研究対象の発見という点において、今後より一層関心を注ぐべきと思われる領域として指摘しておきたいのは、電氣的に複製される「二次的な声の文化」。「オンゲ一九九一・二七七一・二八二」への関心である。「近代」以降において、肉声として現象することは、文字のみならず、様々な電氣的な複製媒体によっても媒介されうるといふ事実を今一度確認しておきたい。肉声としてのことばの生起そのものが、メディアの相関的な力学と不可分な関係にあり、その事実をふせて「口承」のみ

を剔出することはできない「高木二〇〇a.二」。われわれの生活は、肉声のリアリティーと、それとは異質な「二次的な声の文化」が生み出すリアリティーにも支えられている。肉声による対面的なコミュニケーションが重要な研究対象ではなく、ということではなく、メディアによって複雑に媒介されることばの発話／受容を生活実践のなかで問い直す場として、口承文芸研究がひろく開かれていく可能性について考えていくことが必要なだろう。

生活実践にうめこまれたことばの運用に関心をむけつつ、「二次的な声の文化」を積極的に議論の対象として呼び込んでいくための争点として、以下で取り上げたいのは「ラジオ深夜便」(NHK第一／三時二〇分前後～翌日五時)である。「深夜便」は、「アンカー」とよばれる進行役のトークを軸として、ニュース、日本各地あるいは世界各地の様々なレポート、音楽、歌、インタビューなどのコーナーによって構成されるラジオの深夜放送である。

まずもって、このような深夜放送を口承文芸研究の視野に入れることを奇妙に思われるかもしれない。番組の進行、音楽・歌の解説、ニュースなどの「事実」を伝えようとすることは「文芸」という関心からはもつとも速くにあるようにも思える。また、この番組には歌・音楽のレコードが流されるが、それらは音楽産業のもとに大量生産され消費されてきた歌謡曲やポップスなどであって、口伝えのなかでバリエーションを生んでいく

「口承」ではないともみなされるかもしれない。

しかしながら、たとえそれが肉声ではないにしても、「深夜便」につめこまれた複製された声は、現代の高齢化社会を、その根底で一定程度支える力をもっていることは間違いないようだ。「深夜便」は一九九〇年に開始され、すでに十五年以上続いている長寿番組である。中心的なリスナーとして想定されているのは、眠れない、あるいは早起きをする「高齢者」であると言われる。平均寿命の変化や高齢化社会におけるライフスタイルの多様化を念頭においたとき、「高齢者」とは誰かを定義することはたやすくはない。ここではひとまず六十歳代後半以上を中心としつつゆるやかにひろがる層を、暫定的に想定しておきたい。もちろん「深夜便」の想定しているリスナーは「高齢者」だけではないのだが、少なくとも午前二時台～午前四時台は、眠れない／眠りから覚めた「高齢者」が中心的なリスナーとして、想定されていることは間違いないだろう。⁽³⁾

三 アンカーのことば

わたしが関心をむけたいのは、いくつかのタイプの発話行為 (speech act) が充填されることにより、番組がなしていることばを用いた実践行為 (pragmatic act) の総体である。しかし、ここではひとまずアンカーのことばに焦点をしばって、リスナーにとつてのその意義を考えてみたい。「深夜便」において、

番組とリスナーの関係を構造化する時間の流れをつくりだしているのは、なによりもアンカーのことばの流れである。

まずは「誰が話すのか」という点について述べておこう。これまでアンカーに主に抜擢されてきたのは、退局した元アナウンサーたちである。リスナーは齢を重ねつつも元気に仕事を続けるアンカーのことばに耳を傾け、同世代の活躍に親近感を得ることができる。放送開始当初、NHKを「卒業」したベテランアナウンサーたちにとつて、長時間のディスクジョッキーは初体験であったという。「事実」を伝えることが仕事であるアナウンサーの語り口には、一般的に「没個性」が求められていた。つまり、アンカーにとつては「自分自身を、どこまで表現していいのか」という点が不安であったという。そこで制作側は、アンカーが自分の名前を頻繁に放送中に述べるといふ方針をとった「山口二〇〇五・二二一・二三三」。これはつまり、「誰が話すのか」ということを顕在化することであり、結果的に親近感を演出することにもつながっていったと考えられる。

次に「どのように話すのか」について述べておきたい。「深夜便」では、××です、××でしょうか、というように対面的に話しかけるような語り口が用いられている。こうした会話を模倣した語り口は、リスナーの親近感を得るうえで効果的である。しかしながら、このような語り口は、他のラジオ・テレビ番組でも日常的におこなわれている。たとえば、ニュース原稿を読む「アナウンサー」から会話調で語りかける「ニュース

キャスト」への変化に代表されるように、語り口の「会話化」は、多くの視聴者（聴取者）を獲得するための技法として、現在では日常にあふれている〔伊藤二〇〇六二八—三〇〕。では「深夜便」のアンカーの語り口には、どのような位置づけが必要なのだろう。

「深夜便」が放送開始当初に想定したコンセプトは、当時の一般的な深夜放送、つまり若者向けの番組とは対称的な特徴をもたせることであつたという〔春海二〇〇五—一一—一二—一三〕。まず重要であつたのは、早口ではない、ゆつくりとした語り口である。ここでは、「深夜便」のアンカーのその静かな抑制的なトーンを考察するために、イントネーションに注意を向けてみよう。端的に言うならば、アンカーの語り口は、ラジオでニュースを読むアナウンサーの語り口と、オールナイトニッポンなどに代表されるような若者向けのディスクジョッキー（以下DJ）の語り口とのあいだの位置にある。ニュースアナウンズにせよ、DJにせよ、どちらのイントネーションも、リスナーとの関係を構造化するための演出であるわけだが、ここで言う「あいだの位置」とは、その両極の中立点ではなく相対的にニュースアナウンズの極に近い位置を指している。

ミハイル・バフチンのことばを借りるなら、イントネーションは聴き手、とりあげられる対象、さらには発話の状況が不可分からんで生起する〔バフチン二〇〇二—一六〇—一六七〕。その意味において、イントネーションには、きわめて社会的か

実践的な契機が内包されている。換言するならば、言語は発話され、イントネーションを付与されることによつてはじめて、時と場所を刻印された発話者のものとなると言えるだろう。ラジオニュースの語り口は、対面的な状況にはないという点において、また発話内容に対する感想を制御しようとする点において、脱状況的・脱個人的な性格が強く、結果としてフラットなイントネーションを獲得している。DJの語り口を支えるイントネーションの起伏は、感情とともにはずむのであり、まさにそれは対面的な会話調を徹底して模倣したモードのもとにある。「深夜便」におけるアンカーの語り口は、「正確さ」を旨とするニュースアナウンズのフラットなイントネーションを出発点としながらも、ひかえ目ながらも個性を打ち出すことによつて、DJのざつぱらんで開放的なおしゃべりに少し近づいた位置にある。その相対的な位置は、アナウンサー本人の側からすると随分と個性を許容する語り口であると言えるだろうし、DJに慣れた者にとつては、ニュースの語り口に近いと感じられるかもしれない。「深夜便」のアンカーの声は、あくまでも事実確認的な声のあり方を暗黙の前提としつつ、そこから一歩踏み出して個性化⇨人格化が試みられた声である。

ゆつくり、落ち着いて、時には間を十分にとつて話されるアンカーのことばにいかなる行為が想定されているかについて考察する際に、象徴的と思われることばがある。一般的にテレビ（ラジオ）に接していると、「お見逃し無く（お聞きのがしなく）」

と注意喚起をうながすことは投げかけられることは珍しくない。しかし「深夜便」でアンカーが時折語りかけるのは「眠くならたろうぞご無理をなさらないように」という旨のことはある。内容を伝えることが役割であることはもちろんなのだが、ここには伝える内容が何か、あるいは内容が伝わったか否か、という基準とは別のことばの役割があることを意味している。ひとまずそれは「寄り添う」行為あるいは「安心させる」行為だと言っていだろう。

おわりに―総体的な実践行為の理解に向けて―

以上のように、アンカーのことばは、リスナーの深い夜をナビゲートしていく。仕事や作業をしながら、あるいは横になって目をとじながら、ひっそりとイヤホンで聴き入りながら……、というように受容される「深夜便」のことばは、リスナーの生活実践に埋め込まれたことばであり、ときとしてリスナーの切実な孤独感を引き受けることになるだろう。しかしながら「深夜便」において、「寄り添う」「安心させる」といった行為は、アンカーのことばのみに託されているのではない。つまり、アンカーのことばは「深夜便」における中心的なことばではあるが、部分に過ぎないとも言える。それはまさに、番組全体がなし得る「実践行為の総体」に関心をもっていると先に述べた所以である。懐古調の番組内容を含みながら、なおかつ現在進行

形の時間感覚の共有が基調となつている「深夜便」の特徴を論じるには、少々紙幅が足りないようだ。⁽⁴⁾

以上では、「ラジオ深夜便」をとりあげて、実際の生活感覚が様々なメディアに媒介されてつくりあげられているという認識のもとに、「二次的な声の文化」をテーマとする意義について論じてきた。「深夜便」の声は生活／生存のリアリティーを支える側面をもっている。しかしながら、口承文芸研究における既存のジャンルを参照するだけではその社会的な意義を位置づけることが出来ない。既存のジャンルの自明性、拘束性を問題にしつつ、そのジャンルが囲いきれていないことばの技術／芸術をひろいあげていく方向性が、今後も意識的に続けられていく必要があるだろう。

注

(1) 「現代（現在）」を記述しようとする試みがある一方で、直接的もしくは間接的に「口承文芸」の「近代」を問いつつ研究が増えてきたことも、この十年間の傾向のひとつと言えるだろう。「近代」を問うことは、「口承文芸」の「現代（現在）」を相対化する基礎的な作業であるだけでなく、口承文芸研究が「近代」のただなかに誕生したということをおまえて、研究の視点にまつわる拘束力についての議論のきっかけでもある。『口承文芸研究』誌上では、たとえば「メディアの結節点としての〈口承〉」(二三

号)、「日本口承文芸と「近代」(二五号)といった特集で「近代」への関心の高まりを確認することができる。

- (2) 近年に限って例を挙げるとすれば、調査史の再検討としては、國學院大學説話研究会の記録が今後の議論の前提となるだろう「国学院大学説話研究会他編・二〇〇五」。また『口承文芸研究』誌上において例を挙げるならば、「研究者論」としては、高木史人の「研究者というメディア」論「高木・二〇〇〇b」、既成ジャンルの再検討としては根岸英之の論考「根岸・二〇〇五」、文献資料の再検討としては石井正己による論考「石井・二〇〇五」などがある。

- (3) 「ロマンチックコンサート」(午前二時台)、「にっぽんの歌こころの歌」(午前三時台)は、懐かしい音楽・歌を集めるコーナーであり、また「こころの時代」(午前四時台)は、各界で活躍する人々のインタビューや講演を放送するコーナーである。

- (4) さらにふたつのタイプの「二次的な声」について言及しておこう。ひとつは、「深夜便」でかけられるレコード(CD)の歌である。「にっぽんの歌こころの歌」では設定されたテーマに沿って、一時間弱の間にたっぷり曲数をかけることが特徴であり、その特集の厚みは、リスナーの記憶を喚起させることに一役かっている。第30回日本口承文芸学会大会シンポジウムの質疑応答では、常光徹氏から、リスナーの「お便り」と口承文芸研究における「生

活譚」との類似性についての指摘があった。リスナーとアンカーの関係を梓づける番組構成上で重要なもうひとつのことは、一時間毎に入るニュースや天気予報のこぼである。世の中の最新情報が提供されることにより、まさに刻一刻と進む現在において、アンカーとリスナーがつながっているという感覚がたびたび確認されていく。これらについては、拙稿「ラジオと高齢者―「深夜」とは誰のものか―小川伸彦・山泰幸編『現代文化の社会学入門』ミネルヴァ書房、近刊予定)でもう少し具体的に取り上げている。

引用文献

- 石井正己 「佐々木喜善論―口承文芸への逆襲」『口承文芸研究』二八 二〇〇五
- 伊藤守 「ニュースのディスコース分析、マルチメディア分析」伊藤守編『テレビニュースの社会学』二〇〇六 世界思想社
- 小澤俊夫・吉川周平・中川裕・兵藤裕己(司会) 川田順造 「口承文芸研究の課題」『口承文芸研究』二〇 一九九七
- 川田順造 「なぜわれわれは「伝承」を問題にするのか」『日本民俗学』一九三 一九九三
- 國學院大學説話研究会・國學院大學民俗文学研究会OB有志編 『学生研究会による昔話研究の50年―フィールドワーク

の記憶と記録―』二〇〇五（発行は編集と同じ）

関一敏「ことばの民俗学は可能か」関一敏編『民俗のことば』

一九九八 朝倉書店

春海一郎「ラジオ深夜便誕生物語」『ラジオ深夜便完全読本』

二〇〇五（初出は一九九六年） NHKサービスセンター

高木史人「特集・メディアの結節点としての〈口承〉の射程」『口

承文芸研究』一三三 二〇〇〇 a

高木史人「研究者というメディア」『口承文芸研究』一三三

二〇〇〇 b

根岸英之「『市川の伝承民話』における「世間話」「生活譚」

再考―市川市国府台周辺の「軍隊にまつわる話」を通して」『口

承文芸研究』二八号 二〇〇五

山口剛「90年4月〈ラジオ深夜便〉初放送のころ」『ラジオ深

夜便完全読本』二〇〇五 NHKサービスセンター

オング・W・J「声の文化と文字の文化」（桜井直文他訳）

一九九一 藤原書店（= Ong, W.J. *Orality and Literacy: The*

Technologizing of the Word, 1982, Methuen & Co. Ltd.）

バフチン・ミハイル「発話の構成」『バフチン言語論入門』（桑

野隆他編訳）二〇〇二 せりか書房

〔付記〕本稿は、第30回日本口承文芸学会大会「シンポジウム／

口承文芸研究のこれから」における「口承文芸研究は「落日」
をのりこえたか」という発表をもとにして寄稿されている。

発表では、研究対象の拡張と「二次的な声の文化」というと
いう論点に基づき、「近代」における研究対象として浪花節
をとりあげ、「現在」のそれとして「ラジオ深夜便」をとり
あげた。本稿では、焦点を後者にしほり、発表当日ふれられ
なかつた考察を若干付け加えている。

（まなべ・まさよし／大阪大学）